

◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.26（2015年4月号）◆

桜が咲いた後でも肌寒い日があったり、また上着のいらぬほど暑い日があったり、それでも確実に新緑が深まっていくこの頃、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。さて、『Intelligence』15号が予定より少し発行が遅れておりますが、来月中旬には刊行の予定です。5月16日(土)の諜報研究会の時にはご覧頂けるかと思えます。20世紀メディア研究会は4月25日および5月30日に開催予定ですので、こちらにもご出席賜れば幸いです。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第91回 20世紀メディア研究会】（3月28日（土）午後2時～5時半）

・陳 霖（蘇州大学鳳凰伝媒学院教授）：「メディア史的叙述の視点—前坂俊之『太平洋戦争と新聞』から見ると」（通訳：曲揚）は、昨年中国語訳が出版された前坂氏の本について、その研究方法と内容について批評してくださいました。

・安野 一之（早稲田大学現代政治経済研究所研究協力者）：「CLO 文書に見る宣伝用刊行物没収」は、外交資料館で公開された CLO=終戦連絡中央事務局の文書から、占領軍が没収を命じていた戦時中の日本のプロパガンダ刊行物がどのように没収されていたのか、その過程の明らかになった部分を論じて下さいました。

・宮杉 浩泰

（明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）：「昭和戦前期陸軍の対ソ連通信諜報活動—島内志剛文書を中心に」は、国会図書館県政資料室所蔵の島内文書から戦前期における陸軍の対ソ連諜報、特に電文傍受による五数字の解読情報がフィンランドとの間でやり取りされていたことなどを話して下さいました。

・加藤 哲郎

（早稲田大学客員教授）：「731 部隊二木秀雄の免責と復権—占領期『輿論』『政界ジープ』『医学のとびら』誌から」は、731 部隊の重要人物だった二木が、占領期に金沢で『輿論』『日本輿論』を発行し、さらに東京で『政界ジープ』という右翼時局雑誌を左翼の『真相』に対抗する形で刊行し、それによって 731 部隊関係者の免責・復権をはかると、さらに『政界ジープ』恐喝事件で転落し、同誌記者たちは総会屋など裏社会へ轉身し、その後は二木は「日本イスラム教団」総裁になるなど、興味深い転変を語って下さいました。

※なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、4月25日(土)で、吉本秀子さん、日比嘉高さん、田島奈都子さんがご報告の予定です。その後は、5月30日(土)、6月27日(土)を予定しております。なお、NPO インテリジェンス研究所による諜報研究会は5月16日(土)に開催予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】

ジェレミー・ウォルドロン著、谷澤正嗣・川岸令和訳『ヘイト・スピーチという危害』(みすず書房)は、言論の自由と規制との関係から注目されている「ヘイト・スピーチ」現象の定義、問題点などを、尊厳と不快感の峻別によって明確にしようとする理論書。関屋直也・瀬川至朗編著『メディアは環境問題をどう伝えてきたのか』(ミネルヴァ書房)は、環境メディアの理論と歴史、および地球温暖化などの問題に対する具体例の分析を論じている。

【コラム：韓国外交史料館】

韓国の外交史料館は、ソウルを流れる漢江の南、江南とよばれる地域に立っている。2006年4月に開館した同館では、大韓民国が建国された1948年以後の外交文書が所蔵されており、毎年3月には、30年を経過した外交文書を中心に、機密解除された新規文書が公開されている。

今年は、1984年度に作成された外交文書が公開された。その内容は、日本の主要メディアでも報道された。だが、気になるのは、報道された新規文書の着目点が、韓国・外交通商部が作成した史料解題やプレス・リリースの内容と、かなりの部分で重複していることである。史料の「読み方」が、史料を公開する側の「見方」に引きずられないようにするためには、何が必要なのか。これは、韓国だけでなく、世界中のアーカイブズ利用者が直面している重要な課題であろう。

[4月21日付文責：小林聡明]